

第 14 号



川越初雁会



川越初雁会第八回総会開催される



総会当日の会場風景

平成三〇年九月一日、くすのき祭と同日、川越氷川会館で、第八回川越初雁会総会が開催されました。岩堀会長挨拶の後、長坂議長の進行で、平成二十九年度の事業報告、並びに決算の承認、平成三〇年度の事業計画案と予算案が承認されました。

ひき続き、記念講演が行われました。要約は以下に記載します。

初心者のパラリンピックへの道のり

講師 児玉 直氏 (高五十七回) 平昌パラリンピックアイスホッケー日本代表

中学三年の時に骨肉腫を患い、片足切断。二〇一〇年から川越市役所に勤務。翌年からパラアイスホッケーを始め、昨年平昌パラリンピックに出場。



講演中の児玉氏

競技について

日本の成績

高五十七回の児玉直です。本日は川越初雁会の総会記念講演ということでお招きいただき、ありがとうございます。パラアイスホッケーを始めてまだ七年あまりですが、思いもかけずパラリンピック出場というところまで来てしまいました。今日は、これに至る経緯を、なぜアイスホッケーをやるようになったのかをお話したいと思います。

まずパラアイスホッケーとはどのような競技なのかをご説明します。ソリのようなものに乗ってホッケーをします。GKを含め六対六で勝負しますが、GKを除く五人はDFが二人、FWが三人と決められています。選手交代はちよつと特殊で、試合が止まった時以外でもプレイ中にいつでも交代できるという特色があります。かなり激しいスポーツで、全力疾走するとすぐに消耗するので、二、二分くらいでどんどん交代します。競技時間は各ピリオド十五分、ピリオド間に十五分休憩、計三ピリオドで多くの得点を取った方が勝ちというスポーツです。

私が関わるようになってからの日本の成績はというと、二〇一〇年バンクーバーパラリンピックは銀メダル獲得、二〇一二年世界選手権はAプール七位、二〇一三年の世界選手権はBプール二位、二〇一五年の世界選手権はAプールで八位と最下位に終わりました。二〇一六年の世界選手権はBプールで二位。この結果、翌二〇一七年の平昌最終予選に出場することができ、この最終予選で二位となって平昌パラリンピックへの出場となったわけです。

競技を始めたきっかけ

私がホッケーを始める前のことについてお話しします。小、中学校を通じてバス

山岳部創部の頃

金子勇二(高三回)

ある山岳部員の想い出 第三回

前回に続いて、金子先輩のお話を掲載します



学生時代の金子氏

にあつては山岳部活動

であり、参加者も多く、また私達学年の二十名中に、山岳部主将となつた糟谷君、副主将となつた柳下君、部係となつた宮崎君(初

創部の頃の想い出

雲取山の山小屋、初めての飯盒での炊事、大木丸ごと燃やす鉄板囲いのかまどの火、何もかも驚きと興奮であつた。そのとき難しい顔をした背の高い小屋番の人がいて、火まわりが均等になるように世話してくれた。その小屋の管理人は大量の飯盒の炊き具合を見ていてくれたのである。この人こそ私がずっと尊敬をし、指導を仰いだ「鎌仙人」と富田鎌次郎氏であつた。この雲取山登山は、学校

プスの山々の奥深さ、厳しさ、静かさ」につながる山への思いが底に続いていたように思う。山の良さを理解する山岳部の姿である。

君等に記憶が残るが、中学生くさくても頼もしき新人達であつた。お世話になつた先生方顧問

山岳部の活動の初めは雲

佐藤徳四郎(国語)

取山と信じていたが、記念誌に初めて学校行事(教師

二十一年から二十二年

付)登山について、滝沢先

鈴木睦男(国語)

輩が二十一年春には中津川

二十二年から二十三年

渓谷を目指したと述べられ

木村信寿(化学)

ているが、私は二十一年度

二十三年から二十五年

は、夏の雲取、秋の武甲山

以上の先生方の他、雲取

以外は全く知らなかつた。

山で掛原(数学)、松本(体育)と関根(事務長)、奥日

記念誌を見て記憶の不確か

光で秋庭(定時制)等の各

さを恥じ入り乍らも、雲取

先生方の参加があつた。

登山の気持ち覆したくな

記念誌の各年度を通して

い。

が、惜しくもバラバラで関

連性が無いように見える。

私の同期には五年間通して

の山行の多くは、部員プラ

部員であつた糟谷君、柳下

ス山好きの有志の任意参加

君、宮崎君がいた。(いずれ

の形でメンバーが構成され

も故人)

ていた。二十三年から新制

エピソード一

一年生が入部して雰囲気

山岳部への認識

が変わつたと思う。この時

二十三年末、生徒会本部

の一年部員で目覚ましかつた

代表者会議の時のこと。各

のは、八木君、中根君、島崎

部への予算配分原案作り

の席上で、少額の金の奪い

合いの時、運動部中一番少

ない山岳部(多分五千円か

六千円)に対し、「山岳部は

金持ちが山歩きする。頂上

に着いたら万歳ぐらいして

帰ってくるのだから予

算は文化部並みで良い。」

と、某運動部の代表から暴

言を受けた。

この時、偶然傍聴していた柳下君(私もいた)が「君達は、天皇陛下も挨拶する国体の種目に山岳部門があるのを知らないのか」と怒鳴り山岳部の六千円の原案で通した。そのとき口惜しかったのは、他の代表メンバー誰も何も言わなかつたことである。

エピソード二

二十三年頃、部の活動が定例定期的になりつつあつた。部員宮崎君は家から父親払い下げのガリ版に山行記録を勝手に刻み、階段下

山岳部報の誕生

二十三年頃、部の活動が定例定期的になりつつあつた。部員宮崎君は家から父親払い下げのガリ版に山行記録を勝手に刻み、階段下



最初の山岳部バッジ

の教師用印刷機を使って「山岳部報」を発行した。

わら半紙二枚ほど山行内容やら、山で感動した事や、下級部員への注意などは、皆から感謝されたものである。先生方も暖かく黙認し、ガリ版紙わら半紙の使用を援助してくれた。生真面目な頑張りや、やがて部報「秩父嶺」と発展し、山岳部バッジ誕生へ結実したのである。

エピソード三

山岳部バッジの誕生

家庭の経済状況で部の登山に参加できない私の都合の良いとき登山(すなわち単独行)で二十三年の秋三ツ峠へ登ったとき、峠山頂南面の扇岩では、若者の大声とハーケンを打つ金属音に

出逢った。八王子高校山岳部の十人程度のメンバーであった。(指導者は東京徒歩渓流会の人)

そこで、一人で山に来るのを責められたものの、明るいクライマーの卵達と弁当を食べ乍ら話し合い、次に友達を連れて再会する約束をして分かれた。私の新しい登山への目も開かれることになった。

一ヶ月後、柳下君と共に三ツ峠扇岩で彼らと再会し、クライミングに驚いた後、バッジの話になった。驚くべき事に連中の胸には、英国山岳会と同じようなデザインで、丸形銀色にHACと浮き彫りにしたバッジが光っていたのである。帰りの富士吉田線の車中、二人はバッジの事、デザインのことで夢中であった。

学校に戻り、二人の原案を糟谷君、宮崎君等に見せ、美術の白井先生に相談した。(新制高校章は白井先生の案

が全校生徒の賛意により決まったもの。)

先生は形とデザインについて褒めてくれ、一部分修正の上、さらに生地の色は、色の表より選んで濃紺を使つて原案の形に塗つて見せ「こんな実物なら素敵だと思うよ。」と助言してくださつた。

今、記念誌の口絵写真の中に部報ワンダラーの写真が載っているが、表紙部分にあるバッジと思われる図がある。バッジを實際日常襟に付けた物だとしてらいつ変わった形になったのであろうか。このバッジは、部員が詰め襟服を着ていた頃、二学年下の八木君(二十六年山岳部主将)等の下級生部員も得意気に左襟に付けていたのを今でも思い出す。

部報「秩父嶺」も、部活動で活躍する時代を反映する中で変わったのであろうと思われる。若者は真剣であ

ればあるほど、自分達の活動にも変化を求め、表現にも変化が現れる。しかし、大袈裟かもしれないが、その時々には生きたものが歴史として残されていけば良いことで、今なお続く事は嬉しい。

エピソード四

私の出会った人

私の家の都合から始まった幾回かの単独行の中で、出会つて未だ強く心の隅にある人の思い出を幾つか書いてみたい。

一 中島 喜代志氏 この人は国鉄土合駅、山の家管理人で、出逢つたのは二十三年六月中旬である。山岳図書館で知つた谷川岳の事が知りたくて、東松山熊谷経由で土合山の家に寄つたときである。

小屋の中をうろつく中学三年の私に「おい君誰と来たのかね。」と、優しい声であつたが、後ろめたく心細い私は震える声で「谷川岳

が知りたくて来ました。」と答えたが、装具は古道具屋で買った四本爪のアイゼンとまがい物様のさびの出たピッケルだつた。

でも、はつきり正直に答えた事が気に入られたのか「一人で谷川へ来るのはまだ分駄目だよ。今日は奥に用事がある。午後三時頃までで良いのなら一緒に歩こう。」と言つてくれた。旧国道奥にある成蹊高校のヒュッテまで案内してくれながら、谷川岳の山の特徴、昭和に入つてからの若者の遭難(墜落死)の事、一の倉沢、幽の沢、堅炭岩のぞき等の話を聞きながら、途中遭難者追悼のプレートに頭を下げ往復した。

二年後、従兄と谷川岳へ登つた帰途、山の家は少し変わったものの中島さんは覚えていてくれ「大きくなつたな」と肩を叩いてくれた。

(次号に続く)

雁の記

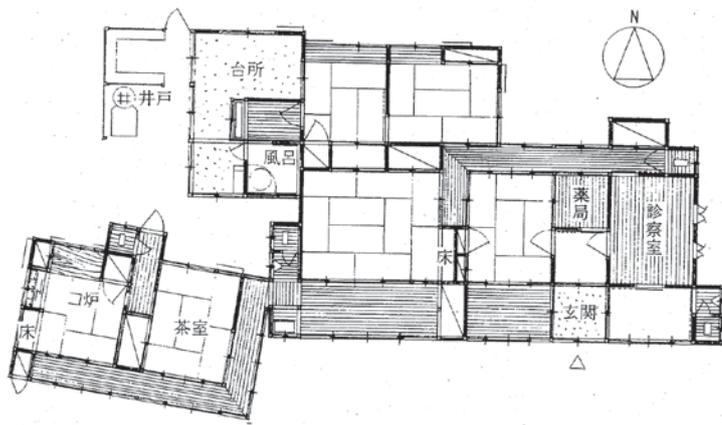
不染亭(ふせんてい)

川越散策日記

荒牧 澄多

(高二七回)

島崎藤村と川越、この繋がりは皆様周知のことと存じます。これについては、尾崎勝美氏(高十一回)が「武蔵野ペン」に二十回以上にわたり詳述されています。川越市立中央図書館の二階の郷土資料コーナーに揃っていますので、ぜひ一読を。



加藤家旧宅の平面図(荒牧 澄多氏作図)

藤村と静子夫人が加藤家を訪れたのは、昭和三年(二九二八)のこと。当時、加藤家が建っていたのは、現在の新富町一丁目(旧黒門町)、八幡通り沿いに建つ川越パークホームズの一角でした。玄関脇の植え込みの中にある石柱に「島崎藤村



藤村ゆかりの地の石碑

ゆかりの地」と記されていますので、買い物や散策のついでにでもご覧ください。加藤医院の建物は、この辺りの地主さんの隠居家として使われていた離れ座敷に始まり、その後、二回ほど大きく増築して図のようになりました。

正時代の初め頃建てられたそうです。図の中央部にある床の間を備えた十畳間のほか、一・二間であったと伝えられています。大正十二年の関東大震災で被災した加藤家が、郷里の川越を頼り、移り住んだのがこの離れでした。

その後、医院を開業するため、大増築をします。右下の諸室です。外観は、ピンク系のペンキで塗られた洋風の下見板張り、和瓦をのせたかわいらしい建物だったと記憶しています。この部分は左右対称。中央に玄関を配し、右側が診療関係諸室。左側が待ち合いです。玄関を入って正面には薬局

があり、そこで受付や会計も行われていました。今も昔も、町のお医者さんでは玄関の溜まりの正面に受付がありますよね、今日、医療分業が制度化され薬局は必要なくなりましてが、子供の頃、医者に行くときと受付の小窓から覗く奥には、なにやらよくわからない小瓶が大量に並んでおり、興味津々でした。北側には、先生などが使う廊下が回っています。廊下の突き当たりには、スツフ用便所も。これらと軸をずらして建てられているのが、藤村が義母のみきに送った茶室です。なぜずれているかというと、奥の家に行く通路が斜めに横切っていたからです。静子夫人の姪ごさんから尾崎氏が聞き取りをした結果、茶室の増築は昭和四年とほぼ確定しています。茶室棟は二間からなりまして、炬が切られ、床の間、天袋と違い棚を設けた床脇からなる四畳半と、控えの間の六畳です。この二部屋を廊下がし字に囲みます。この建物は、マンション建設に伴い解体されることになりました。そこで、加藤家の墓所がある中院で引き取ることとなり、平成四年に移築されました。その際、茶室としての使い勝手を考えてして間取りの一部が変更されています。今は、川越市都市景観条例による指定を受けています。

加藤医院の建物は、この辺りの地主さんの隠居家として使われていた離れ座敷に始まり、その後、二回ほど大きく増築して図のようになりました。

この部分は左右対称。中央に玄関を配し、右側が診療関係諸室。左側が待ち合いです。玄関を入って正面には薬局

があり、そこで受付や会計も行われていました。今も昔も、町のお医者さんでは玄関の溜まりの正面に受付がありますよね、今日、医療分業が制度化され薬局は必要なくなりましてが、子供の頃、医者に行くときと受付の小窓から覗く奥には、なにやらよくわからない小瓶が大量に並んでおり、興味津々でした。北側には、先生などが使う廊下が回っています。廊下の突き当たりには、スツフ用便所も。これらと軸をずらして建てられているのが、藤村が義母のみきに送った茶室です。なぜずれているかというと、奥の家に行く通路が斜めに横切っていたからです。静子夫人の姪ごさんから尾崎氏が聞き取りをした結果、茶室の増築は昭和四年とほぼ確定しています。茶室棟は二間からなりまして、炬が切られ、床の間、天袋と違い棚を設けた床脇からなる四畳半と、控えの間の六畳です。この二部屋を廊下がし字に囲みます。この建物は、マンション建設に伴い解体されることになりました。そこで、加藤家の墓所がある中院で引き取ることとなり、平成四年に移築されました。その際、茶室としての使い勝手を考えてして間取りの一部が変更されています。今は、川越市都市景観条例による指定を受けています。

なお、不染亭の名はみきの茶人としての雅号にあり、藤村が名付けたそうです。調査は解体直前の緊急調査だったため、間取りを取るのみに終わりました。※武蔵野ペン第七一号を参考にしました。

秋の散策会

築地界限散策

原 宗康(高四十一回)



築地本願寺にて

ちらを選び、秋晴れの下、多くの方が庭園の見学を含む往復コースを楽しまれました。

もう一方は、築地場外および歌舞伎座タワーを見学する

今年の秋季散策会は、その前月に豊洲へ移転が行われた築地場外界限を散策いたしました。

十一月三日、有楽町線で川越を出発した一行は、まず新富町駅から築地本願寺へ向かいました。関東大震災で再建された古代インド様式の本堂は、荘厳な佇まいで国の重要文化財に指定されています。参拝後、本堂を見学した一行は、ここで二グループに分かれて別行動となりました。

一つは浜離宮恩賜庭園を見学するコースで、当初の予想に反して大半の方がこ

その後歌舞伎座タワーを見学、有料のギヤラリーでは、公演中の舞台をちよつとだけ覗き見ることができました。

それぞれのコースに分かれた参加者は、場外の裏路地にある、社長がマグロの初セリで話題の「すしざんまい奥の院」にて、再集合し懇親会がスタート。場外の喧騒から離れ、料亭のような落ち着いた雰囲気の中、自慢の寿司に舌鼓を打ちました。

当日は若手の初参加の会員もおりましたが、すぐに打ち解け大いに盛り上がり、時間を忘れて懇親を深めました。

第十四回ゴルフコンペ

優勝者

島田 邦生(高十二回)



10月4日川越カントリークラブにおいて

第十四回初雁会ゴルフ大会にて運よく優勝させていただけました。大会運営にいつもご尽力くださる岩堀会長をはじめ、運営責任者の松本寛さんと御担当の皆様は大変お世話になり厚く御礼申し上げます。

新ペリアでの順位に恵まれ優勝できましたのも、同期の三枝さん、磯野さん、山中山さんと心おきなくゴルフを楽しめたことが運を呼び込んでくれたと思います。これからも、出来る限り参加させて頂きます。

藤沢周平読書サロン

圓山 壽和(高十七回)

声を出して読んでいます

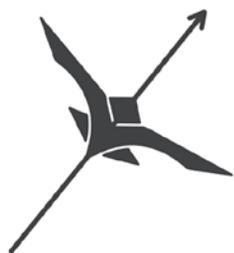
平成三〇年当初から二月に一回、時代小説家・藤沢周平の読書サロンを、奇数月の第三木曜日、午後三時に開催しています。

発端は川越初雁会の集まりで顔を合わせる機会の増えた岩堀さん(当会会長・高八回)に、小生の方から「藤沢周平の読書サロンでもやりませんか」とお声掛けをしたことでした。

会場は「幸すし」の長島さん(高十三回)に受け入れてもらい、身近で呼び掛けたメンバー九名で動き出し

この一年間は「三屋清左衛門残日録」を取り上げ、毎回分担し朗読してきました。次の一年は「蟬しぐれ」を読んでいきます。

川越高等学校開校百二十周年事業のロゴが決まりましたので紹介します。



1世紀の重み×20年の弾み 川越高校120周年

発行人

会長 岩堀 弘明

事務局 川越市六軒町一三〇

題字 吉沢翠亭(義和)

印刷 (株)櫻井印刷所